

消化器・肝臓センター

NEW一冊 NO.37

2018.7

上部消化管狭窄に対する ステント療法

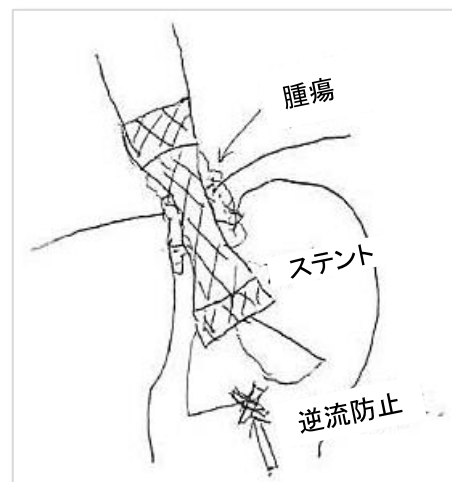
根治切除不能の上部消化管腫瘍では、病状の進行とともに腫瘍の増大による消化管狭窄が生じます。胃幽門狭窄に対しては胃空腸吻合を行い経口摂取可能となることが多いですが、食道、食道胃接合部の狭窄に対して外科的介入は困難であり、ステントを用いた症状緩和が行われることが多いです。

逆流の防止について

食道癌治療ガイドラインでは、「ステント治療は胸部中部～中下部食道癌が良い適応であり、胸部下部～腹部食道癌ではステント下端が噴門部にかかると胃内容の逆流現象が生じ、嚥下性肺炎などを併発する危険性があるので適応には慎重を要する。」とあるように、逆流が問題となり食道胃接合部癌に対するステント留置術の適応は限定されていました。しかし、近年逆流防止機能を備えたステントが考案され適応が拡大されるようになってきました。ガイドラインでも、「逆流防止弁付きステントの有効性を示す報告もある」と追記されています。

症状緩和の有用な手段

当院でも、食道胃接合部癌の増大による狭窄に対し、ステント留置を行い8カ月以上の予後が得られた患者さんを経験しています。消化管狭窄により経口摂取困難になると著しく患者さんのQOLが低下し、化学療法も施行困難となるため、ステント留置による症状緩和は有用な手段であります。当院では、がん医療に際して出来るだけQOLが高く維持されるようにいろんな点において改善を心がけています。



市立貝塚病院
TEL : 072-422-5865

外科
川田純司、辻仲利政、今本治彦